

CAROWAA

CAROWAA —チャロワ

アチョリの言語で「our village」「our home」「our land」といった意味を持つ言葉です。

JICAプロジェクトとともに自分たちの故郷がより発展する、という気持ちを込めて、グルオフィスの現地スタッフが名づけてくれました。

ちなみに配色イメージは北部らしく「ラテライト」です。



速報！アムル県分割

各種報道によれば、本年7月1日より、アムル県が南北に分割され、北部が引き続き「アムル県」、南部が「ニョヤ県」となることが政府決定されました。

アムル県は2006年にグル県から分離、新設されたばかりの県で、現状でも他県より行政能力が脆弱であるにもかかわらず、分割によりさらに弱体化することが予想され、今後の協力を継続する上での懸念材料となります。現在実施中のプロジェクトの対象地域に変更はないため、これまでの調査結果に直接の影響は少ないものの、アムル県をひとつの県として取りまとめており、見直しが必要な箇所も出てくるのが考えられます。

もうひとつの懸念は新アムル県庁所在地が

変更となる可能性があることです。コミュニティ開発プロジェクトでは現アムル県の中心に位置する、アムル県庁付近に行政能力向上を目的として、多目的ホールや職員宿舎を建設中です。しかし一部の県議会議員より、新アムル県の中心に近い場所に県庁を移す要望が出されており、現在も結論は出ていません。

このところウガンダでは来年の大統領選挙を念頭に置いた県新設が続いており、昨年は6県を新設、今年は14県が追加される見込みです。アチョリ地域においても、昨年はキトゥグム県が分割、今回はアムル県と同時にパデル県も東西に分割されることが決定し、プロジェクト開始時は「アチョリ4県」だったもの



アムル県分割図
中心の緑線で南北に分かれる予定。

が「アチョリ7県」となります。

想定が難しかった県の分割ですが、プロジェクトでは今後の推移を見つつ、コンサルタントチームと知恵を出し合いながら前向きな提案ができるよう、工夫を重ねてきたいと考えています。

パイロットプロジェクトの進捗状況

3月末によくやく着工したパイロットプロジェクトですが、大きな進展を見せています。

まず、道路チームが担当する2件の橋梁新設と前後の道路改修のうち、橋梁1については一時的に川の流れを変え、橋梁の始点となる基礎部分を人力で掘削しています。以前の橋は住民が丸太を組み合わせてつくったもので、周囲は草木でうっそうとしていましたが、今は広大に切り開かれ、まるで別世界です。橋梁前後もこれまでは人が通れる程度の狭さで、雨季のぬかるみは相当なものでしたが、道幅が広がり、整備されつつあります。既に車両通行可能な強度のある仮橋が架

かっており、人と自転車しか通行できなかったこの場所を、今は車が走っています。これまで、川の反対側へ行くには遥か遠くまで、相当な時間をかけて迂回しなければならなかったのが、まるで夢のようです。

コミュニティ開発プロジェクトでは5件のパイロットプロジェクトを担当しており、どれも順調に進捗しています。特にパボサブカウンティ事務所の行政能力強化を目的として建設される公共サービスホール、職員宿舎の土地は以前、ウガンダ北部最大とも言われたパボIDPキャンプとして使用され、住民移転、

墓移転の儀式、という長いプロセスを経て実現しているため(ニュースレター第1号、第3号参照)、関係者一同、この地の変容ぶりを見るたびに感慨深いものがあります。

当地は現在も雨季が続いているため、作業が雨のために中断されてしまい、工程に若干の遅れが見られるのが目下の課題ですが、JICAグルオフィス、コンサルタントチーム、建設会社の3者で定期ミーティングを行っており、緊密なコミュニケーションを図りながら、今後も適切な施工管理を実施していきます。



以前の橋



橋梁1工事現場
左側が以前の橋。右奥が新橋梁の基礎。



墓移転直後のパボサブカウンティ用地
(2010年2月)



現在の様子
公共サービスホールの基礎部分

アフリカ部より調査団訪問／中坪編集次長4度目の取材

5月17～18日、JICAアフリカ部よりウガンダ担当の松本職員、ウガンダ事務所より飯島企画調査員（インフラ担当）が北部復興支援プログラム進捗状況視察のため、また17～22日には国際開発ジャーナル社より中坪編集次長が取材のためグルを訪問しました。これまでアジアでの経験が長い松本職員は、初のウガンダ、初の現場視察で驚きの連続だったようです。前日からの雨でひどく道がぬかるみ、車がスタックするハプニングもありましたが、現場では足を泥まみれにしながらもプロジェクトの進捗について熱心に質問していました。4月に赴任したばかりの飯島企画調査員はミンダナオでの経験から、復興支援には非常に関心があるとのこと。今後有益なアドバイスをいただければと思います。



コミュニティ開発チーム・上野団員より説明を受ける松本職員（写真中央）と飯島企画調査員（右）

中坪編集次長はこれが4度目のウガンダ北部取材。今回はパイロットプロジェクトの進捗のほかに、1996年に起きたLRAによる139人もの女子学生の大量誘拐事件の現場となったアパッチ県アボケのミッション系女子高校を訪問し、当時の状況を聞き取りました。139人もが一度に誘拐されたものの、勇敢なシス

ターがLRA兵士たちを追いかけて交渉し、109人を解放させたというニュースで、国際社会がウガンダ北部の紛争に目を向けるきっかけとなった事件でもあります。

これらの記事は「国際開発ジャーナル」に連載中の「ウガンダ通信」に掲載される予定です。



道路チーム・南団員より説明を受ける中坪編集次長（写真左）

橋梁落下事故～その後～

前号でお伝えしたアムル県アティアックでの橋梁落下事故について、続報です。

5月21日に再度現場を視察したところ、2週間ほど前にトレーラーはようやく撤去されたようで、現在は橋だけが残っている状態でした。川の水深が浅い時は下流を歩いて渡れるそうですが、当日は増水中。住民はいったいどのように橋を渡るのだろうと観察していると、対岸から男性が慣れた足取りで橋の欄干を歩いて来ます。アティアック市内に通うため、毎日このように渡っているとのこと。そのうち、対岸に若いカップルが自転車でやって来ました。近くに座っていた少年と何やら話をすると、その少年が自転車をかき上げて橋を渡り、カップルもそれぞれ裸足になって欄干づたいに歩いて来ました。聞くとなんと少年は「渡し業者」！橋の落下後すぐに新ビジネスを始めているとは、なんとたくましい。しかも1回1,000シリング（約50円）。工事現場



現在の橋梁の様子

の労働者の日給が3,000～5,000シリング（約150～250円）であることを考えると、期間限定の仕事とはいえかなり高額です。女性（17歳）は妊娠初期で、その日初めて検査を受けに診療所へ行く途中とのこと。橋を渡ったアティアック市内にしかヘルスセンターがないため、夫（18歳）と命がけの受診です。彼らによれば橋梁落下について県から何の情報もないそうで、復旧計画もないだろうとのこと。どこかの支援を受けるまで、この橋は放置されるようです。



渡し業を始めた少年



橋を渡る妊娠中の女性（手前）と夫

前回の橋梁落下事故について、かなりの反響がありました。「砂糖はどうなったの？」という質問があり、私も「川が甘くなったのでは？」「生態系に影響は？」などと思っていたのですが、事故を聞きつけた住民が駆け付けて持って行った、連絡を受けた砂糖会社がすぐに回収に来た、とのことで、特に影響はなかったようです。「甘い魚が釣れるようになった！」なんて話を聞いたら落語みたいで面白かったですけどね・・・